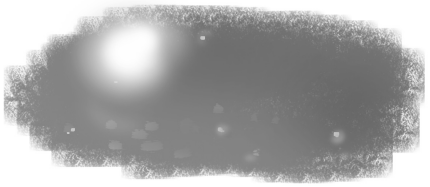

秋の馬

宮坂静生

馬の目の撥條(ぜんまい)巻かれ九月尽

馬術とは秋水に添ひ行くごとし

体内の紡錘廻す秋の馬

忘るまじひもじきときの山の色

帰るべき夢を持たざり花火殻

コロナみな光に替へよ秋彼岸

棗煮てどこかに母が待ちゐたる

空からも鰯降る日や網を引く

経文を唱へてゐるよ蟻地獄

地下壕を出て斑猫を見失ふ

優曇華や巫(かんなぎ)鑽火もて祓ふ

炉(ろ)心(しん)溶(よう)融(ゆう)轡虫消えてしまひ

綿虫のとびくるいつも崖つぷち

（二部「俳壇」十月号より）

詩歌のちから

見直される自然 6

宮坂　静生

「義」のない戦争を悼む
――被害と加害の痛み重ね

〈磆山に佇ち夕焼のわれも磆　静生〉（二〇二〇）

ことしで戦後七五年たつ。私の戦後とは何であったかを考えると、戦争が残した歴史の傷痕への見方が変わってきたことに気付く。文芸評論家の加藤典洋が『敗戦後論』で提示した、「『義』のない戦争」（侵略戦争）による「死」をいかに弔い、あるいは「負の遺産」（戦争の残したもの）をいかに護持、継承するかという問題である。

いわゆる一九六〇年安保闘争の二年後の六二（昭和三七）年、浅間山麓の大日向開拓地を詠んだことが、俳人としての私の出発点であった。戦後の国のあり方を問う社会運動の高揚期に学生時代を過ごし、新条約成立後の社会の保守化に戸惑った。世は社会的関心が急速に冷め、高度経済成長期、レジャーブームの時代へ変貌する。私は暗鬱な気分を表現する対象を、切株が残る開拓地に求めていた。

『長野県満州開拓史』総編などによると戦前、長野県は満州開拓移民数三万一二六四人と全国でも飛び抜けて多い地域であった。中でも南佐久郡大日向村（現佐久穂町大日向）は、村のほぼ半数の二一六戸、七九六人が満州（現中国東北部）の吉林省舒蘭県四家房に分村移民した。悲劇は四五年八月九日にソ連が参戦して以後、満州からの逃避行で起きた。村人の半数の三七四人が死去。帰還し、浅間山麓の新たな開拓にいのちをつないだ入植者は六五戸、一六五人であった。

〈白萩や妻子自害の墓碑ばかり　静生〉

「満州よりの帰途、妻子足手まとひとなりて、自害さす」と前書きを付す。集落の外れの墓地へ行った。入植から一五年たっても墓地は簡素で、萩が咲き満ちていた。さすがに「自害」との墓碑銘はなかったが、私の中では「自害」（自決）の二字が揺るがせにできないことばになっていた。俳句の出発がこの墓標詠からとは、われながら重く、暗い気持であった。

アジア・太平洋戦争の戦没者は日本だけで三一〇万人、うち民間人は八〇万人といわれている（吉田裕『日本軍兵士』中公新書）。その「『義』のない戦争」の無名の犠牲者を悼む手だてはどこにあろうか。しばし私は墓碑に佇み、追いつめられ自らいのちを絶った「妻子」のことを深く心に刻んだのである。

同じ思いはことしの夏も痛感した。私ははじめて松代大本営地下壕（長野市松代町）に入った。第二次大戦末期、四四（昭和一九）年一一月一一日から翌四五年の終戦の日まで、九カ月間に軍部が極秘裏に掘らせた、全長一〇キロ余の巨大な防戦シェルターである。

この地に日本の中枢部・大本営、政府各省庁、日本放送協会、中央電話局などを移す計画。何よりも国体護持のために天皇御座所および三種の神器を収める賢所の造営が立案され、およそ七五％が終戦までに完成していたという。

これは「『義』のない戦争」の「負の遺産」の最たるものだ。かねて同地下壕を俳句に詠むことで「ねじれにねじれた」歴史の傷痕を考えたいと思っていた。

日本の第二次大戦、アジア・太平洋戦争が侵略戦争であれば、同地下壕の突貫工事に従事させられた六〇〇〇人とも七〇〇〇人ともいわれる朝鮮人労働者の心情は、加担したくもない侵略へ加担させられた「ねじれ」の気持ちであろう。

狭い象山口から入り、地下壕の五〇〇メートルのコースを歩いた。長野市が管理し公開している地下壕の一部である。

照明はあるが暗い。岩盤は堅い灰白色の玢岩層に削岩機で穴を開け、ダイナマイトで爆破した。茶色のもろい砂岩や凝灰岩などは鶴嘴で掘った。岩盤に触れる。冷たい。瞬間に亡きがらへの触感がひらめく。壕壁に「大邸」と落書きがある。強制連行された労働者が敗戦を知り、歓喜から故郷韓国の都市名をカンテラからの油煙で書いたものかと聞く。胸が詰まる。天井は高くて二・七メートル、幅四メートル。ときどき滴りが落ちる。

躓く。「磆」と呼ぶ砕石片が転がる。おびただしい量の磆はトロッコで運搬し、畚で担ぎ出した。かつては象山の麓に巨大な丘状の磆山が連なり、戦後各地の道路舗装に使われた。磆こそ、従事させられた労働者の血肉の塊のように私には思われた。私自身も磆だと自戒する気になる。

冒頭句は磆山に私を佇たせた独白である。

飛躍した私の思いは、大日向開拓地に松代の地下壕を重ねていた。戦争の悲劇を被害者として悼むことは同時に、加害者としての痛みを意識することではじめて共感されるのだと気付いたのである。

（二〇二〇年九月十日「信濃毎日新聞」より転載）